蘇峰、書籍、そして水俣……

書物に囲まれた蘇峰（水俣市立蘇峰記念館提供）

はじめに

徳富猪一郎、一般には蘇峰の号で知られるこの郷土の先人については、よくご存じのことと思います。

何をいまさら、と思われるかもしれませんが、広く知られたジャーナリスト蘇峰を、いま一度、この水俣でふり返ることも、あながち無意味ではないでしょう。題して「蘇峰、書籍、そして水俣…」。ただしここでは、しばしば言及される言論人としてよりは、あまり話題にされることの少ない、蘇峰翁のある一面について、お話したいと思います。

愛書家蘇峰

古典文学の研究者にはよく知られた事実ですが、蘇峰は無類の本好きでした。読書家であったことはもちろん、その性癖は特に蒐書に発揮され、みずからそれを「道楽」と称していました。熱の入れぶりは、父親を心配にさせるほどのものであったとは、蘇峰自らの回想の弁です。

蒐集の対象は、和漢洋に及び、古今の珍書稀書が彼のもとに集まりました。特に和漢書については、善本書目の選定と解題を担当した川瀬一馬が、「いかなる種類内容の古書をも漏らすことなく富士の山型に蒐集しているのは、日本広しといえども成簀堂だけである」というように、特定分野に偏らぬ、しかも稀書から雑本に及ぶ厚みのあるコレクションとなっていました。

なお、「成簀堂」とは、蘇峰が自らのコレクションに付した文庫名で、現在は一般財団法人石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）に収蔵され、研究者等への閲覧に供されています。古典研究、書誌学研究にとってまさに宝庫です。

蘇峰学人

蘇峰の蒐書について、先に「道楽」と述べましたが、そこには多分に蘇峰の含羞も含まれているでしょう。彼と書籍との関係について、マニアとしての面を強調しすぎることは、公正を欠くことになります。事実、蘇峰自身、書物の蒐集は「修史の資料」と「修養」のため、とも述べています。

先の『善本書目』には、古くは奈良、唐代から江戸時代におよぶ古典籍が、所狭しと名を連ねていますが、川瀬によれば、蘇峰はそれらの一点一点につき、書物としての性格や内容を細かくメモしていたようです。繰り返しになりますが、その蒐書の対象は日本の古典籍だけに限らず、中国、朝鮮で作られた本にも及んでいましたから、蘇峰の書物を見る眼がいかほどのものであったか、推測がつくでしょう。

彼はしばしば、「蘇峰学人」と署名しますが、まさしく「学ぶ人」であり、「学」びを重んずる「人」でもあったと思われます。

蘇峰著『愛書五十年』昭和8年、ブックドム社刊。
表紙に「蘇峯学人」の署名が見える。

（淇水文庫看板。水俣市立蘇峰記念館蔵）

淇水文庫

これもいまさらのことですが、水俣にはかつて公共図書館として、淇水文庫がありました。現在では、文庫の建物を市立蘇峰記念館に衣替えし、図書館の機能は現在の市立図書館に移されています。淇水文庫の創立は、昭和四年の五月。ただし、設立の計画そのものは大正十一年から浮上していました。

当時、水俣町長であった深水頼資は、地元の教育振興のために、二つの案を考えていたそうです。奨学金制度の整備と並んで検討の対象になっていたのが、図書館の設置だったわけです。

深水は大江義塾での師であった蘇峰に相談します。蘇峰は図書館がよかろうとの回答とともに、まず二千円寄贈したそうです。といっても、当時のお金の価値は、なかなか実感として伝わるものではありません。参考までに述べておくと、この当時の米の値段が、十キログラムでおおよそ二円から三円の間を推移していたようです。

米の値段ではあまりイメージが湧かないという方には、家賃ではいかがでしょう。東京都板橋区仲宿の一戸建て、もしくは長屋形式の家の場合、大正十三年でほぼ十円。地価の高騰した現代とでは比較にならないとも言えましょうが、いかほどの大金であったかの理解の一助とはなるでしょう。蘇峰の郷土への愛、そして教育にかける熱意は、無論お金で計るべきものでないにせよ、その気概は知っておくべきことです。

ところが、図書館ほどの事業になれば、個人の寄付だけでなんとかなる、というほど甘くはありません。一時は、計画断念に追い込まれかけたようです。しかし、蘇峰は従弟の徳永正らの協力を得て広く建築資金を募り、完成に漕ぎつけたのでした。蘇峰自身も、各方面に支援の呼びかけをしたようで、そのことにかかわる書翰が新たにみつかりましたので、最終頁の資料紹介を参照して下さい。

寄贈書のことなど

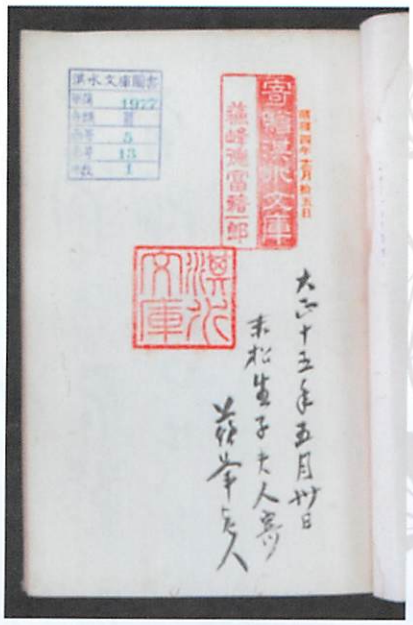
図書館建設に目鼻が付いたところで、蘇峰は更に追加で一万円のお金と、図書約二千四百冊を寄贈しています。開館当初は、この蘇峰寄贈本が文庫の基幹をなすこととなります。その後も、文庫の運営には何かと気遣ったようで、最終的に蘇峰からの寄贈図書は、九千冊近くになったといいます。

熊本県立大学文学部日本語日本文学科では、地域の文化資源の再発掘を研究課題に掲げ、県下各地で古典籍その他の調査を進めていますが、その一環として、これら蘇峰ゆかりの書籍群について、可能な限りその全貌を明らかにしようと、これまで蘇峰記念館や市立図書館のご協力を得て、淇水文庫旧蔵本の調査を進めてきました。

◆市立図書館保管「淇水文庫」旧蔵本のうち和装本の調査風景

写真手前に積み上げられているのが、和装本の数々。江戸時代末期から明治時代の本が残されています。筆で書写された「写本」や、版木で印刷された「版本」と呼ばれるものを集中的に調査しました。

内容の多くはくずし字で書かれていますので、その調査にはそれなりの手間がかかります。調査した本の中には、結構、珍しい本も含まれています。機会をみて紹介したいと思います。



『落梅集』表紙と蘇峰識語

識語には「大正十五年五月卅（三十）日／末松生子夫人寄／蘇峯老人」と記されています。

まだまだ、調査は途上段階で、調べるべきことは多く残されていますが、ここには経過報告の一部として、蘇峰手沢本の実例をいくつか、以下、市立図書館の淇水文庫旧蔵本の中から示してみようと思います。

公共図書館の本にしてはいけませんが、愛書家の中には自家所蔵の本に、このように書き入れをする人がいます。また逆に、愛蔵の本には何ひとつ汚れをつけてはならないと、大事にパラフィンなどでくるんで保管しておく人もいます。蘇峰は典型的な前者。彼はしばしば、入手した書籍や恵贈を受けた本に、好んで名前などを書き入れました。ここにも、筆勢に特徴のある蘇峰の書き入れ（識語）が認められます。彼の筆まめな様が実によくうかがわれるでしょう。その愛書ぶりは、彼が集めた書物、ここに示したように寄贈した書物、そして彼が作った書物というように、あらゆる面に現れています。

彼の愛書癖については、まだまだ紹介しつくせないものがありますが、それらにはまた別の機会にふれることと致しましょう。

物としての書籍も、知的空間としての図書館にしても、その意義を声高に唱えることのあまり流行らない時代になってしまいましたが、蘇峰という先人の遺業を振り返ることで、今という時代をみつめ直す契機となれば、と思います。そのためにも、蘇峰と書籍というテーマで、なお探究を続けたいと思っています。

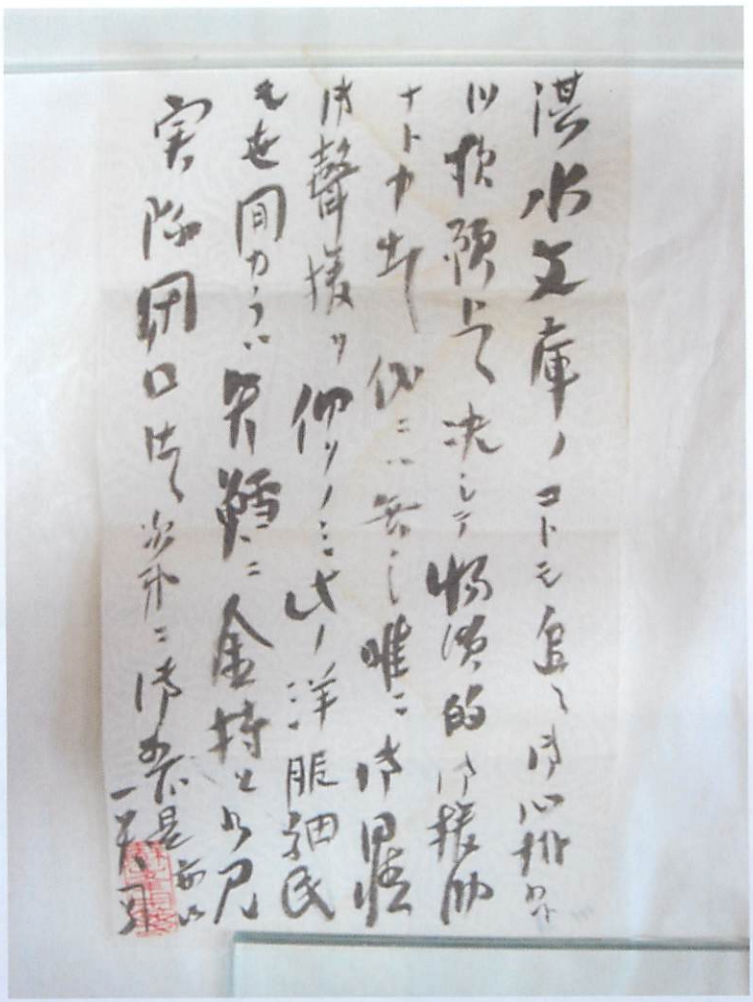
『打睡洞百絶』表紙の識語

「贈淇水文庫　老蘇八十二」と墨書されていますので、八十二歳の時の寄贈本です。蘇峰のもとには、このような詩集類が多く送られてきていたようです。

◆市立図書館蔵の淇水文庫旧蔵書の調査風景

市立図書館に移管された旧蔵書の一点一点について、淇水文庫時代の図書受入原簿と突き合わせ、どのような経緯で文庫に入ったものか、確認をしているところです。この作業により、旧蔵書の多くが蘇峰寄贈本であることを改めて確認できたとともに、蘇峰以外からの寄贈本も残されていることなどが判ってきました。

【資料紹介】後藤是山宛 蘇峰書翰（熊本市後藤是山記念館蔵）



熊本市後藤是山記念館には徳富蘇峰から寄せられた書翰が多数保管されているが、その中に淇水文庫に言及したものが確認できた（ふ-991）。

大森山王から投函されたこの書翰に日付は明記されていないが、封に捺された消印は「4. 6. 28」とある。淇水文庫が昭和2年（1927）に開設されたことを踏まえると、昭和4年6月28日と考えてよいだろう。

淇水文庫に関する言及は、追って書きとして付け加えられたような3葉目の便箋に認められるので以下書き出してみよう。なお、引用に当たっては、旧字は常用漢字に改めたが、仮名遣いは底本に従った。また、歴史的文書につき、今日では不適切と思われる表現もそのままとした。

「淇水文庫ノコトモ追々御心掛被下候様願上候。決シテ物質的御援助ナト申上候儀ニハ無之候。唯ニ御同情御声援ヲ仰クノミ。此ノ洋服細民モ世間カラハ矢鱈ニ金持と被見実際閉口仕候［…］」

レトリックとしてか、気恥ずかしさからか、蘇峰は「物質的御援助ナト申上候儀ニハ無之候」とは述べているが、是山に対する緩やかな金銭的援助の要請と見てよいだろう。開設早々、淇水文庫の存続は危うい状況だったのだろうか。それとも、将来的な存続を見据えての根回しだったのだろうか。

（大島明秀・熊本県立大学文学部准教授）

【参考文献】

- 『淇水文庫概況』市立淇水文庫、一九五一年
- 週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史』朝日新聞社、一九八一年
- 水俣市史編さん委員会『新水俣市史　下巻』水俣市、一九九一年
- 川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵新修成簣堂文庫善本書目』御茶の水図書館、一九九二年
- 森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成　物価の文化史事典』展望社、二〇〇八年
- 熊本県立大学編『蘇峰の時代』熊本日日新聞社、二〇一三年

発行日：平成二十九年二月十五日
発　行：水俣市立図書館
　　水俣市立蘇峰記念館
　　熊本県立大学
　　（平成二十八年度地域貢献研究費／蘇峰・蘆花研究プロジェクト経費）
編　集：熊本県立大学文学部　鈴木　元